

# 田所と莊園

——東寺領播磨国矢野庄の田所一族の歴史——

牛 尾 浩 臣

## はじめに

矢野庄の田所は、その系譜を一四世紀の初めから一六世紀の初めまで約二〇〇年間たどることができる。この期間には、後宇多上皇が文保元年（一一三三）に矢野庄を東寺に寄進してから、東寺による莊園の実質的支配が終了するまでの、東寺領矢野庄のほぼ全期間に当たる。本稿では、下級莊官として矢野庄に暮らした田所の一族の約二〇〇年の歴史を追ってみた。田所とは、在地で年貢徴収の実務にあたる下級莊官である。矢野庄の莊官については、榎原雅治氏の「莊園制解体期における莊官層」・伊藤俊一氏の「高井法眼祐尊の一生」・「中世後期における「莊家」と地域権力」の研究があり、また、矢野庄の詳しい歴史と研究史については、『相生市史』一・二巻に述べられている。

## 一 最初の田所 脇田昌範

矢野庄は、保延三年（一一三七）に立券され、その後南禅寺領となる「別名」と「例名」に分かれる。永仁五年（一二九七）に「例名」は、地頭海老名氏と、領家藤原範親との間で下地中分され、地頭海老名氏の領地を「東

方」・領家藤原範親の領地を「西方」と称するようになる。後宇多上皇により東寺に寄進されたのは、この「例名」の「西方」の地である。後宇多上皇より寄進されたこの矢野庄「例名西方」を支配したのが東寺の供僧方と学衆方である。今後、特に断らない限り、矢野庄と言え、矢野庄「例名西方」を指す。

矢野庄の最初の田所として史料上登場するのが僧でもある脇田昌範である。昌範は、暦応二年（一三三九）に田所職に任ぜられたと主張している。<sup>④</sup>この年は、斗代定が行われており、昌範は、その実務に当たっている。それ以前、昌範が史料上最初に登場するのが嘉暦三年（一三二八）であり、この時昌範は、矢野庄内の福勝寺の免田と延里名田畠・得善名田の名主職を東寺より宛てがわれている。<sup>⑤</sup>その後、昌範は、東寺より建武二年（一三三五）に、「相伝」にまかせて、福勝寺の修理別当職に補任されている。昌範以前、元亨二年（一三二二）に、この福勝寺修理別当職に補任された人物に脇田政範<sup>⑦</sup>という僧がおり、政範は、恐らく昌範の父かそれに近い人物であったと考えられる。脇田氏の後、田所職を継いだ本位田氏の一族の者が、福勝寺の住持職を争った時、「其上依為本位田一族中氏寺、非其親類者、曾而無相伝儀之所」<sup>⑧</sup>と主張しているように、田所の家筋は、東寺の支配の始まる以前からあったと考えられる福勝寺の住持という地位を背景として始まったものであるらしい。<sup>⑨</sup>

脇田昌範が、矢野庄の史料に登場するこの時期は、建武三年（一三三六）に、悪党寺田範長が矢野庄をめぐって東寺と争い、矢野庄の有力農民の活躍で東寺方が勝利するなど、寺田一族と、名主・百姓の争いの時期にあたる。

『相生市史』の指摘<sup>⑩</sup>にもあるが、脇田昌範は、悪党寺田氏との抗争の中から台頭してきたものと考えられる。

ところで昌範自身についてであるが、田所に任命されたという暦応二年以前の建武二年に非法をはたらき、名主・百姓に連署の起請文で訴えられ、次の起請文を東寺に提出している。

立<sup>⑪</sup>申起請文事

（中略）

一 百姓等かもつ所の名田畠等、重代支証なきを、ふりよの外<sup>ニ</sup>不可申与他人事

一 為連署名主・百姓等、我として、雖不申、以人、内儀としても、そ、なかし煩をなし、不可訴申事

一向後為名主・百姓等、就公私、背先例、不可申行非法事

(後略)

( ) は筆者、以下同じ。

昌範は、①百姓の持つ名田を、重代の支証がないといって、他人に与えないこと、②訴えた名主・百姓に対し人をそのかし煩いをなし、訴えさせないこと、③今後、名主・百姓に対し、先例に背き非法を行わないこと、以上三か条を内容とする起請文を書き、これに背いた場合は、「可被停止庄家経廻<sup>⑬</sup>」と、述べており、この時既に実質的には田所に近い仕事を行っていたものと考えられる。また、昌範は暦応三年(一二四〇)に、再度前年の斗代定に関する非法を名主・百姓に訴えられている。その非法の内容は、「自本斗、今斗者、号五勺之減少也ト、被竹打之条、無極之愁訴也<sup>⑭</sup>」と、年貢をはかる弊に竹を打って大きくする、「何斗代定後、于名々、所給、令違背御下知、彼昌範恣至名田等、令鏡望事<sup>⑮</sup>」と、他人の名田を手に入れようと望んだり、「依塚堀之事、彼昌範為損名主・百姓等、于庄家、引入守護使、被召捕百姓等<sup>⑯</sup>」と、守護使を引き入れ、百姓らを召し捕らせている事など、八ヶ条にわたっている。このように、昌範は、明らかに田所としての地位を利用して、勢力の拡大をはかうとしており、その姿勢が、他の名主や百姓との対立を生んでいた。

しかし、その反面、守護方の悪党が荘内に乱入したことに對し、名主・百姓等とともに城郭を建設し戦っている。「用害掘構酒肴事、田所管領名延里内、依<sup>⑰</sup>彼<sup>⑱</sup>害<sup>⑲</sup>」・「矢野白石城事、任申請、以真末名内田地、構城郭、可<sup>⑳</sup>庄家警護<sup>㉑</sup>」と、学衆方評定引付に記されており、昌範の持つ延里名に堀をめぐらした要害が建設され、また真末名にも白石城と呼ばれる城郭が建設され、「公文・田所、名主・百姓等、令同心合力<sup>㉒</sup>」、悪党を退治するよう東寺より命

じられている。

この時、悪党側の中心人物で矢野庄の名主でもある寺田範長は、鎌倉末に公文であり、この地域で悪党として名を馳せた寺田法然の孫である。範長の乱入は、寺田氏の勢力の回復を目指した行動であると考えられるが、この範長は、昌範の甥であり、恐らく昌範の姉妹と寺田法然の息子範兼の間に生まれた子であると考えられる。昌範は、事件の発端では、範長が悪党である吉川孫太郎に内通しているという噂を否定するため、起請文をもって、明らかにする旨を、東寺に申請しており、二人の関係が深いつなりのあるものであることがわかる。<sup>19)</sup>

また、田所とともに城郭の警備に当たるように命令されている公文は、この時、藤原清胤が任じられており、公文・田所は、「両沙汰人」と呼ばれ、在地で実務にあたる荘官であった。

脇田昌範の最後は、観応元年（一二三〇）に、悪党兵衛次郎守高が荘内に乱入した件で、昌範が敵方を引きこんだとして、文和元年（一二三二）に、田所を解任されている。<sup>20)</sup>昌範の田所職在職期間は、一四年であった。この事件で昌範について、給主法橋祐実は、「兵衛次郎守高以下輩庄家乱入事、田所昌範之結構候云々、事実候者、併老狂之至候歟<sup>21)</sup>」と、公文にあてた書状に記しており、昌範は、この頃年老いて田所の職務が果たせなくなっていたようである。また、公文の清胤も、足利直義方の罪科人として隠居させられている。観応の擾乱は、矢野庄の下級荘官を巻き込んでいた。

昌範の立場をながめてみると、一つは、福勝寺修理別当職という僧侶としての宗教的立場、二つは、延里名田畠・得善名田の名主職を持つ名主としての立場、三つは、田所としての年貢の徴収の実務者としての立場、四つは、田所としての立場を利用して、名主・百姓と対立しながら勢力拡大をはかる立場、五つは、田所として、悪党など荘園への侵入者から荘園を守る立場、六つは、その悪党と呼ばれる勢力と日常的にはつながっている立場が見られ、下級荘官と言っても、昌範の在地での複雑で多面的な立場を知ることができる。

## 二 兵衛尉家兼

脇田昌範が解任された後、延文二年（一三五七）に、田所職に補任されたのは、兵衛尉家兼と言う人物である。家兼は田所職とともに、荘内の種近名の名主職を宛てがわれている。昌範と家兼のつながりは分らないが、おそらく、一族の者であつたと考えられる。家兼の田所職請文<sup>(22)</sup>とともに、家兼の請人（保証人）として、政所であつた僧秀恵が請文<sup>(23)</sup>を東寺に提出している。政所秀恵は矢野庄の中心の神社であつた大僻宮の住持職を持つ人物である。秀恵の請文が必要であつたことは、家兼の立場が昌範の後を継ぐ形で田所になれるほど強いものでなかつたことをあらわしている。

家兼は、理由は分らないが、結果的にはほとんど田所としての職務を務めず、史料上からは消えてしまう。そして、延文四年（一三五九）からは、秀恵が田所代として算用状などの作成にあたるようになる。この時期は、東寺の僧祐尊が地下代官として矢野庄に下向して指揮を始めた時期にあたっている。

## 三 本位田家久

兵衛尉家兼に続いて応安三年（一三七〇）に田所職に補任されたのが、法師丸と名乗っていた本位田家久である。<sup>(24)</sup>家久については、延文四年の学衆方引付に、「昌範後室老尼申、成恒名事、任申請、可被下補任云々」<sup>(25)</sup>とあり、その成恒名の名主職が、昌範の後家の希望にそつて法師丸に宛てがわれていることから、『相生市史』では、家久を、昌範の一族の者と考えている。<sup>(26)</sup>いづれにしても、家久は、昌範か、あるいは昌範の後家と近い人物である。家久の父は、本位田将監入道と名乗っている人物であるが、それ以上詳しいことは分らない。昌範は、田所職を解任された後、延文四年に近い時期に死亡したようである。

家久が、法師丸を改め家久と名乗り、田所として算用状を作成するのが翌年の応安四年からである。昌範の跡を継いだ田所の誕生である。

この時期荘内は、地下代官祐尊の強力な支配が続いており、祐尊は複数の名田を手に入れるなどし、名主・百姓たちと、祐尊の対立の構図が深まっていた。

永和三年（一三七七）の正月一四日、矢野庄の名主・百姓等が、一味神水して、祐尊の非法を連署起請文<sup>(28)</sup>で訴えて逃散した。永和の一揆の始まりである。この事件で一揆に対し、強硬姿勢で臨む祐尊と、一揆側に立ち、事件を收拾しようとする家久の立場が分かれる。家久は、強政策による年貢失墜を心配する学衆方の姿勢を利用して、一揆側に有利な形で事態の收拾をはかろうとした。家久は、三月二日着の注進状で、独自に東寺に一揆の状況を報告し、「於当代官者、七代不可用之由、及度々神水<sup>(29)</sup>□□□□聞<sup>(30)</sup>」と、名主・百姓等が、祐尊の代官を認めないと誓い合っていることを知らせている。この日の、学衆方の評定では、「家久注進之趣、庄家之珍事也、代官于今、不申入之条、緩急之至極歟<sup>(31)</sup>」と、一揆の実情を隠して報告しなかつた祐尊が非難されている。祐尊の立場が苦しくなるに反比例して、家久の立場が良くなり、家久は、祐尊に代わり、東寺より、佃（供僧・学衆の直轄地）の散田（耕地の割り付け）を、命じられている。家久は、反祐尊の立場に立つことで、有利に立ち回ったと言える。これに対し、祐尊は、この年の一二月二日、小山田の大僻神社で百姓たちが寄り合いをしている場に、守護方の浦上太郎左衛門・祐尊の小姑平田某・その掣原源左衛門尉らに、数十人の悪党を率いさせ、押し寄せさせた。

<sup>(32)</sup>（前略）其後今月二日名主・百姓等寄合小山田、当其時、浦上太郎左衛門、祐尊之小姑平田、<sup>(33)</sup>、同掣原源左衛門尉已下、引率数十人悪党、押寄于小山田、令打擲蹂躪名主・百姓等、奪取太<sup>(34)</sup>□□、<sup>(35)</sup>□召捕彼等、引居川原、<sup>(36)</sup>慥可捧請文、不然者、可誅云々、□□百姓等不承諾之間、搦捕名主・百姓等、悉令籠舍、（中略）已上籠舍人数三十五人、其外一段二段所作百姓者、不及注之、浦上・平田已<sup>(37)</sup>□所従等数十人令警護籠、焼篝火、四方守之、

前代未聞悪行、何事如之哉、(後略)

これは、矢野庄に下向した上使乗田の報告であるが、祐尊たちは、名主・百姓たちを召し捕り、河原に引き立て、祐尊の所務に従う請文を出さなければ誅すべしと脅し、それでも従わないので、三五人のおもな名主や百姓、そのほか一・二段の耕作をしている零細な多数の百姓を閉じ込めるといふ強硬手段にでた。また、翌日、一揆側に立った家久の住宅も「散々令追捕」<sup>(33)</sup>られるという始末である。

しかし、この一揆の結末は、翌永和四年、祐尊の地下代官解任という形で決着を見る。一揆側の要求が通ったのである。

家久については、「自元、於家久者、地下一鉢之上者、不<sup>(可)</sup>信用、可有糺明沙汰」・「次田所家久与同地下噉訴、毎度捧百姓同心<sup>(申状)</sup>□□条不可然<sup>(34)</sup>」と、学衆方評定で一揆側に立った行動が批判されたが、「幸上洛之上者、可召置嚴密起請文之旨、治定<sup>(35)</sup>了」と、たまたま上洛していたので、地下に与同しない旨の起請文を提出を命じられただけで、一件落着であった。

祐尊が解任された後、年貢は、田所の家久が責任者となって直納することとなった。この時、康暦元年(一三七九)分の年貢の和市をめぐって、家久の不正が学衆方で問題となっている。家久は、和市を操作することによって納入する年貢を減らし利益を上げようとしたのである。<sup>(36)</sup>このように、家久も実は東寺に忠実なだけの荘官というわけではなかった。

祐尊が解任された後、しばらくは地下代官が任命されなかったが、永徳三年(一三八一)に明済が、地下代官として下向する。しかし、一〇年ほどたつと、再び明済の非法を訴える一揆が、明徳四年(一三九三)、応永三年(一三九六)と起こる。

この時、家久は、一揆の側には立たず、明済等と行動を共にした。明済が、恐らく年貢の未進などの代わりとし

て、名主・百姓等から預かった家財道具などの質物を「此色々質物破却損、去年十二月四・五ヶ両日上御使・田所方・政所方・善性・上野房相共、以外所行也」と、乗観（上御使）・家久・明済（政所）などが、破却したとして、訴えられている。また、家久は、応永二年（一三九五）一〇月には、「当所の御百姓のことにつき候て、寺命□そむき、かうそにくみし、更々わたくしあるへからす候、毎事同心申候て、ちうせつをいたすべく候」と、一揆方に加わらない旨の起請文を東寺に提出している。

永和の一揆の行動を批判されたためであろうか、家久は、今回は、前回の一揆とは逆の立場に立っていた。ところが、応永三年の一揆で、政所が百姓らによって放火される事件が起きる。この時、放火に参加したという罪で、家久と原源庸の名田が守護方により闕所にされてしまう。そして、名田は、罪人跡として守護方に没収されたしまった。この事件に関し、東寺は、三年後の応永六年（一三九九）に、次の申状を守護方に提出している。

（前略）凡両人者、自百姓訴訟之初、頻致和陸之籌策、就廻無為之計略、押寄于政所屋之時者、参洛寺家、在京之時分也、争可同心仕哉、加之、田所屋、同為百姓沙汰、焼放訖、然者、有忠、無料之处、及無理之讒訴歟、被闕所名田之条、所令迷惑也、（後略）

ここで、放火のあった日には、家久も源庸も東寺に来ており現地にいるはずがないこと。しかも、家久の屋敷は、百姓たちの反感を買って焼き放たれていることを、無罪の証拠として主張しているが、結果としては、この時点では、名田は返つてはこなかった。

この後の家久については、応永九年（一四〇二）の算用状まで作成し、署名をしていることから田所を務めていたことがわかる。家久の田所職在職期間は、三三年に及ぶ長期間であつた。応永十二年（一四〇五）の供僧方評定引付に、「故田所家久」とあり、恐らく応永九年を最後にまもなく死亡したものと思われる。

家久の田所としての行動を振り返ってみると、前半は、地下代官祐尊のもとで、忠実な田所として仕え、永和の



一揆では、明らかに一揆側に立ち行動し、地下代官がいなくなれば、和市を操作することで利益を上げようとし、応永の一揆では、地下代官とともに行動し、百姓等の反感を買って屋敷を焼かれている。在地の荘官でもあり、一面、名主でもある家久の立場は、祐尊や守護などの外部勢力の侵入から村を守り、莊園を守ると言う行動を選択させた。このような行動が、守護方から敵視され、永和の一揆では、住宅を追捕され、応永の一揆では、政所の放火に参加したとして、名田を闕所にされる結果になったのであろう。

#### 四 玄舜

玄舜の田所職の請文は存在しないが、玄舜が田所として年貢算用状を作成するのが応永一〇年（一四〇三）からであり、家久の跡を継いだものと考えられる。この時期の地下代官としては、学衆方の定深、供僧方の了済が下向しており、応永一〇年分より、算用状は、学衆方と供僧方と同じものが作成され、玄舜は田所として両方の算用状の作成に当たっている。守護に闕所とされていた名田も、応永一一年（一四〇四）に東寺に返付され、玄舜に宛てがわれている。このように、玄舜は、家久の名田を寺家から宛てがわれ、また、玄舜の息子が本位田家盛として、次の田所になっていることなど、姓については、本位田とは史料上現れないが、おそらく家久に近い本位田一族の者であろう。

玄舜は、応永一十九年（一四一二）に、和市の不正により、田所を解任されそうになる。この時、玄舜は、京都に呼び出され、「近年御年貢米和市、任御代官奸曲注進状、依加判仕、田所職雖可被召放、付歎申、蒙御免之上者、自今以後、不得御代官語、任美正、毎年の嚴重起請文、別紙可注進仕、凡毎事不存私曲、可致奉公之事」と、起請文を提出させられている。玄舜は、供僧方の地下代官であった了済と相談して、和市を操作し、利益を上げようとしていたらしい。

この事件の翌応永二〇年（一四一三）に、玄舜は、自らの名田の年貢未進につき、「近年窮困無是非事候、（中略）、庄家才学等致忠節之上者、以別儀、年々未進、可預御免之由、歎申之間」<sup>(42)</sup>と、寺家に訴え未進分を免除されている。また、玄舜は、応永二二年（一四一五）、応永二五年（一四一八）、応永三〇年（一四二三）と、損毛による年貢減免を、上洛し申し出て認められている。このように玄舜は、起請文の提出後は、田所としての信頼を寺家より回復したようである。その上、点数を稼ごうとしたのか、玄舜は、応永三四年（一四二三）には、上洛して、「先代官隠田共悉申上忠節」<sup>(46)</sup>と、了済の時代の隠田を上申し、一石分の名田を下されたりもしている。

しかし、その間にも玄舜は、また和市を操作して利益の追求をはかってもいた。応永三一年（一四二四）には、「去年矢野庄年貢於地下市、沽却之時、馬一駄に六十文宛夫賃立、算用状に立申了」<sup>(47)</sup>・「去年年貢号駄賃、一石に六十文宛引公平了」<sup>(48)</sup>と、年貢売却時に馬一頭の荷物につき六〇文を夫賃として年貢から差し引き、また、運送の駄賃として一石につき六〇文を年貢から差し引いたりして、和市が本来一石当たり一貫三五〇文で請け負っていたものを、一石当たり九五〇文に引き下げ算用状を作成していた。この違目を寺家より指摘されているが、結局、「堅依歎申」<sup>(49)</sup>、認められている。

玄舜の時代から、守護方との直接交渉に、田所が出向く例が見られるようになる。応永三五年（一四二八）の算用状に、「坂本□田所相共罷出候て、兵糧米被懸候間、歎可申候処」<sup>(50)</sup>・「寺社本所領□兵糧米被行候間、□可叶候由被申候間、同帰候了」・「白幡城へ田所相共罷上候て、一献振舞候了」<sup>(51)</sup>とあり、最初のものは、地下代官の了快が玄舜を伴って、兵糧米免除の交渉に、赤松氏の国衙代官（目代）である小河新左衛門尉の役所のある坂本（現在の姫路市書写西坂本）に出向き、断られたものである。次のものは、同じく了済と玄舜が、赤松氏の白旗（幡）城（赤穂郡上郡町）へ出向いて、五〇〇文分の酒や品物を差し出したものである。この後も、永享九年（一四三七）には、兵庫の港の「嶋掘人夫」<sup>(52)</sup>の件につき、「田所両度坂本へ罷出時」<sup>(53)</sup>と、玄舜一人で坂本に二度出向き、その後、

「同人夫為奉行、田所罷出時」・「五日役廿二人」<sup>(53)</sup>とあり、玄舜が坂本で矢野庄分の夫役の奉行をし、おそらく人夫の差配をしたのでろう。また、翌永享一〇年（一四三八）に、玄舜は、「八幡夫」<sup>(54)</sup>の件につき、守護代宇野越前守の役所のある広瀬（宍粟群山崎町）に交渉に出向き、「田所守護方罷出候て、サシヲカレ候了」<sup>(55)</sup>と、足止めを食つたりもしている。翌永享十一年（一四三九）にも、人夫の免除の交渉に「同夫事ワひ」<sup>(56)</sup>、坂本・城山三ヶ度罷出候<sup>(56)</sup>と、坂本と、守護館の置かれていた城山城（揖保郡新宮町と龍野市の境）に、三度も交渉に出向いている。矢野庄において、守護からの諸役が本格化するこの時期は、田所玄舜にとっては、守護や守護代、国衙代官などの守護方との交渉に、地下代官と共に、あるいは一人で対応せざるを得ない状況になっていた。

最後に、玄舜は、永享五年（一四三三）の内検帳<sup>(57)</sup>によると、供僧方には、秋次名（年貢四斗二升）・延里名（年貢九斗七升一合）・学衆方には、成恒名（年貢三斗九升九合）の、年貢負担者となっており、嘉吉三年（一四四三）の供僧方の内検帳<sup>(58)</sup>では智善名（二斗四升六合）・徳善名（四斗一升三合）・秋次名（四斗八升）の年貢負担者として記載されている。また、文安二年（一四四五）の算用状<sup>(59)</sup>には、公文名の一反四五代の耕地の耕作者として記載されている。田所でもあり、名主でもあるという立場は、昌範・家久の時代と変わってはいない。また、先に、未進分を敷いて許された例を示したが、永享元・二年<sup>(60)</sup>（一四二九・三〇）時点で、一四石の未進が再び累積している。玄舜の一連の活動を、昌範・家久と比べてみると、未進を願い出て許され、年貢減免を求めて上落して認められ、和市を引き下げたことも結局認められたり、また、地下代官に代わって一人で守護方と交渉したりしており、玄舜独自の行動が目立つ。玄舜の時代、荘園の機構の中で、田所としての彼の立場は、それ以前に比べ、重要性が強くなっていると言える。

玄舜の時代には、正長の一揆に続いて起きた永享の播磨の国一揆、嘉吉の乱によって赤松氏が滅び、守護が山名氏に交替するなど、矢野庄を揺るがす大事件が起きた激動の時代であったが、玄舜は、田所を続け、享徳元年（一

四五二)に、「御公事以下無沙汰仕」<sup>(63)</sup>によつて、田所職をいったん解任されるが、翌享徳二年(一四五三)には、再任される。そして、息子の本位田家盛とともに職務に当たり、長禄元年(一四五七)まで、田所を務めた。玄舜の田所職在職期間は、解任された一年を除き、五四年もの長期にわたつた。

## 五 本位田家盛

家盛が、田所職に補任されるのは、長禄二年(一四五八)である。このとき家盛は、「田所可罷上之由、雖被仰下、無其儀、結句御補任可給之由、申条以外自由至也」<sup>(64)</sup>と、上洛せずに、田所職の補任を望み、その行動が、供僧方の評定で問題となり、一度は、別人に田所職を補任することとなつたが、結局最後には補任された。

家盛は、長禄四年(一四六〇)の内検帳<sup>(65)</sup>によると、徳善名四反一五代・秋次名五反三〇代・成恒名六反四〇代・少目名三反二五代・延里名六反一五代、合計二町六反二五代の名田を持ち、その他、佃を一反三五代耕作する名主である。

ところが、家盛の名田は、思わぬことから守護方により闕所にされてしまふ。

播州矢野庄内東寺御領田所家盛謹言上<sup>(66)</sup>

右子細者、七八歳時分より、女子あちやと申、をひろい候て、此十年斗ふたいの物ニめしつかい候を、先御代官之少物、かたらいをなし候処ニ、去年十月十三日ニ、御代官かわり上洛候間、彼少物、此下女ニいとまをいたし、すて候て、罷上候間、我かふたいにて候間、めしつかい候処ニ、其後十一月十五日ニ、此下女うせ候て、他所ニ廿日あまり候を、めしかゑしつかい候とて、国方よりくせ事とおほせ候て、十二月廿五日ニ村岡方・内藤殿、両使使節入部候て、同大晦日まで御せつかん候間、そのいわれ申ひらき候へ共、公方として承候へハ無力、御礼錢村岡五貫、内藤殿五貫、雑事以下いたつて十五貫余、せめふせめされて、はや公事を御礼錢にて御ミち

やり候間、重而せひの子細ハ一言も承るましくて候処ニ、又当年卯月十四日ニ、村岡・野村・岡部両三人、上下十五、六人にて部候（又略）て、去年御公事ののこりと申候て、名田御給分までおさゑ、關所めされ候間、すてに去年くわふんの御礼錢にて、公事を御ミちやり候上ハ、大ぼんの事にて候とも、さしおかれ候へきところに、又当年ひるかゑし、關所ニあつかり候事、ふひんのしたいにて候由、ひやうことの、様へ御わひ事申候へとも、御承引なく、村方へ御付候事ふひんのしたいにて候、此由能々預御披露候者、畏入可申候、欲仍目安状、如件、

寛正貳

八月四日

これは、寛正二年（一四六一）に、家盛が東寺に宛てた申状である。家盛によれば、代官の小者（少物）のものになっていた、あちやという家盛の譜代の下女が、小者より暇を出され棄てられたので、譜代の下女なので、家盛が再び召し使っていると、この下女が逃亡した。他所で二〇日あまりいたのを、召し返しました使っていると、守護方より、曲事であるとして、一二月二五日に、村岡・内藤の使節が入部し、大晦日まで家盛を折檻し、家盛は、村岡・内藤両方に礼錢五貫文、その他雑事等一五貫文余を責め伏された。その後、四月一四日に、守護方の村岡・野村・岡部の使節一五・六人が入部し、去年の公事の残りと言つて、名田を關所にしてしまった。關所の件を守護代宮田親清（兵庫殿）に託び事したけれども受け入れられなかったと言ふのである。この申状に先立つ二月五日付けで、地下代官の慶泉が、家盛が年末に折檻された事件を東寺に報告している。その中で、慶泉は、「内藤方御内中尾・村岡、御領内の内田小四郎と申物、村岡奉公仕候て、かやうニ案内者付、田所へ使節ニ罷出、上下七、八人にて、同晦日までつめ候て、田所色々折檻仕謹責をいたし、家内をしるし、又ハ名田等を關所すへき由申候を」と、矢野庄内の内田小四郎が、守護方の村岡の被官であり、小四郎の案内で、守護方の使節が七、八人が入部し、家盛を折檻し、家と名田を關所にするを脅したこと、また、「年久しき田所を逐電させ、又ハ名田なんとを關所させ候

てハ、御代官生涯存候て、田所をいろいろすかし、旁々ニ借様申させ候て、先無為ニなし候<sup>68</sup>」と、反発する家盛を慶泉が説得して、村岡・内藤への札銭を家盛に借用させ、支払させたことを述べている。

山名氏が守護になつてから、一段と矢野庄への守護権力の干渉が強くなり、庄内にも内田小四郎のように守護方の被官となる者も現れてきた。守護方にとって、名主でもあり、代々の田所として、莊園を維持している家盛は、邪魔な存在であり、この事件は、守護方が、田所家盛の排除をねらつたものと言えよう。

この事件により、家盛の田所職も、守護方に闕所にされ、没収されたようであり、家盛自身は、寛正四年（一四六三）には、備中国新見庄へ代官として赴き、矢野庄を離れている。家盛の田所職在職期間は、わずか三年あまりであつた。

この後、応仁の乱の混乱で、東寺の矢野庄の支配もいったん失われてしまった。応仁の乱後、東寺の矢野庄の支配は回復するが、応仁の乱前から始まつた請負代官の支配による年貢徴収も、乱後は困難になり、矢野庄は、守護の支配下に入つていった。そんな状況の中で、明応七年（一四九八）に家盛が再び史料上に姿を現す。この時、家盛は、矢野庄の年貢二〇貫文を東寺に送つている。家盛は、この頃、矢野庄に帰り、莊務に復帰したようである。新見庄の代官として、矢野庄を後にして三五年後である。

家盛が復帰した時代の矢野庄は、守護代の赤松政秀が、明応二年（一四九三）に、請負代官に就任し、家盛も、政秀の下で莊務に復帰したようである。先述の年貢二〇貫文の送進は、「去年矢野・高田日損ニ付而、無正体候、雖然、半分之分、可致進納候由、本位田ニ申付切出候処、依地下無力、延引候哉、堅可申付候<sup>69</sup>」と、政秀が、家盛に命じて送らしたものである。復帰後の家盛の立場は、東寺の莊官としての田所ではなく、矢野庄の請負代官になつた政秀の地下代官としてのものに変わつていた。同じ年貢の徴収という職務であつても、仕える相手が、東寺から、守護方に代わつたのである。応仁の乱は、矢野庄の代々の田所職の家であつた本位田氏にとって、莊園領主

の東寺から守護へその主を代える変化をもたらしたのである。

## 六 本位田家延

赤松政秀は、文亀二年（一五〇二）に没し、その跡を政秀の子、則貞がついだ。それと同時に、家盛の子と考えられる本位田家延が、則貞の地下代官として活動を始める。家延は、この年、「当庄御公用銭参拾貫文、御寺納候、爰元被取乱子細候之間、此分候、於来年者、有様調可申候、至以後、聊如在之儀有間敷候」と、政秀が死んだので取り乱しているのです。今年は、年貢三〇貫文を送る。来年からは、きちんとする旨を、東寺に報告している。また、「百足為御祝儀、下野守進覽被申候」と、赤松則貞（下野守）が政秀の跡を継いだ祝儀として一貫文必要であつたことも報告している。

就<sup>②</sup>当御公用之儀、預御札候、則御意趣、雖下野守申聞候、最前所申上候、当年一円之干損にて候間、三百足分上可申由候之處を、色々了簡仕、五百足致御寺納候、猶御札旨、連々可申聞候、更於私、非如在之儀候、（中略）

十一月廿八日 家延（花押）

御公文所

御報

これは、文亀三年（一五〇三）に、干損により、三〇〇足分寺納する予定であつたが、色々工夫して五〇〇足分寺納することを東寺の公文所に報告した家延の書状である。ここでも、東寺から則貞に手紙（御札）が届き、その内容を家延は、則貞から聞かされ、何とか五〇〇足分寺納した経過が述べられている。このように、家延の主人も、東寺ではなく、則貞であり、家延も、則貞の地下代官なのである。このような、年貢の寺納に関する家延の書状は、

永正一四年（一五一七）までみられるが、それを最後に家延は、東寺の史料から姿を消す。家延の地下代官としての活動期間は、一六年であった。その後、永正一七年（一五二〇）には、永山真久が、代官となり東寺に年貢を送っていることから、家延の代官としての活動は、この年までには、終わっていたと考えられる。

そして、矢野庄の歴史が終わるとともに、本位田一族の、その後の姿も追えなくなる。

## 七 本位田一族と福勝寺

矢野庄の田所職を代々務めた本位田一族とは、どのような一族であったのだろうか。一族の姿は、よく分からないのであるが、最初に触れたように、この一族と福勝寺とは、最初から関係のあることがわかる。最後に、この点を少し考えてみたい。

### （前略）

右件住持職者、愚僧幼少之時、雖受源交庵主讓、幼稚之間、依預置瑩西堂、彼僧一期之間者、令住持訖、一瞬已後者、無予議、愚僧可令領知之処、充勝監寺、於智芸者、令絶交瑩西堂、移他門之間、更不可知之由、掠申寺家、任住持職之条、迷惑至也、於当寺者、非東福寺門徒之上者、争如此申哉、其上依為本位田一族中氏寺、非其親類者、曾而無相伝儀之処、充勝任雅意、掠申之条、造意之企、太不可然者哉、所詮、被召出両方証文、被経嚴密御沙汰、任理運、給御補任狀於智芸、為全住持、言上如件、

応永廿六年六月 日

これは、智芸という僧侶が福勝寺の住持職を充勝と争ったときの申状である。智芸は、本位田家久の息子である。この時家久は、既に死亡しており、玄舜が田所を務めていた時期である。智芸の言い分によれば、智芸が幼少であったため、福勝寺の住持職は、源交からいったん瑩西堂に譲られた。しかし、智芸は、瑩西堂と絶交し、他門に移



った。そのため、智芸は瑩西堂が、死んだことも知らず、瑩西堂は、住持職を弟子の充勝に譲ってしまい、充勝が東寺より住持職に補任されているというのである。智芸は、瑩西堂と絶交した後、京都の相国寺に移っており、また、瑩西堂は、玄舜の伯父である。この訴えは、実は、応永一二年（一四〇五）に、一度起こされており、供僧方の評定で議題になったが、その時は、智芸の言い分は認められず、充勝が住持職に補任されている。しかし、この時は、充勝が東寺に差し出した証文が盗まれたものだということが分かり、智芸は望みどおり、福勝寺の住持職に補任されている。

#### 福勝寺相伝次第<sup>⑦⑧</sup>

僧政範——源交——智芸侍者

「源榮西堂——充勝監寺

これは、この訴訟の時に東寺に提出されたものだと考えられる系図であるが、福勝寺の住持職の始まりが脇田政範から書かれている。脇田政範は、先にも触れたが、元亨二年に福勝寺修理別当職に補任された最初の人物であり、本位田一族の歴史も、政範から始まる。応永三〇年（一四二三）年の供僧方の評定には、「矢野庄福勝寺住持職事、先住持去比死去、欲仍親類曷食讓与之由、有其聞、讓狀無子細者、為相伝職之上者、可補任之由、披露之处、不可有子細、衆議了」<sup>⑦</sup>とあり、智芸の死亡した後も、親類の曷食が、相伝の職であるということで、住持職に補任されることが、認められている。智芸の「其上依為本位田一族中氏寺、非其親類者、曾而無相伝儀之处」<sup>⑧</sup>という言いは、東寺にも認められていた。本位田一族は、福勝寺を氏寺とし、その住持職を一族の者が務める血筋で、また、智芸のように、京の相国寺に僧侶を送るような一族でもあった。

矢野庄での本位田一族の立場は、地域の寺院である福勝寺を一族の結合の中核とし、宗教的権威を背景に、庄内に他の一族より優越した地位を確保したものと考えられる。

おわりに

この表は、これまで辿ってきた矢野庄の田所の変遷の年表である。最初の田所昌範の時期は、田所としての地位を利用して勢力の拡大をはかり、名主・百姓等との対立を引き起こすなど、まだその地位は安定したものではなく、田所の成立期と言える。

その後、ほとんど田所としての職務を行わなかった家兼をふくめたの田所空白の時代が二八年続き、家久の時代に移る。家久が田所の三三年間は、田所の発展期と言える。家久は、永和の一揆では、一揆側に立ち、支配力を拡大しようとした地下代官祐尊の排斥に成功し、在地の秩序を守る。また、応永の一揆では、地下代官側に立ち、百姓等の反感を買い、屋敷を焼かれたりしているが、家久の時代は、田所が算用状を地下代官とともに作成するのが

矢野庄の田所職の年表

1339(暦応2)	脇田昌範
1352(文和元)	
	不 明
1357(延文2)	兵衛尉家兼補任されるが活動はなく、政所秀恵が田所代を務める
1370(応安3)	本位田家久
1402(応永9)	
1403(応永10)	玄 舜 解任 再補任
1452(享徳元)	
1453(享徳2)	
1457(長祿元)	
1458(長祿2)	本位田家盛 守護方により闕所
1461(寛正2)	
	不 明
1498(明応7)	本位田家盛赤松政秀の地下代官として復帰
1502(文亀2)	本位田家延 (赤松則貞の地下代官)
1517(永正14)	

通例になり、田所が莊園を維持する重要な職になった時代であり、そのため、守護方より住宅を追捕されたり、政所放火の罪で名田を闕所にされたりしている。

次の玄舜の時代の五四年間は、田所の完成期と言える。算用状の作成は

もちろんのこと、年貢の減免なども認められ、また、守護方との交渉の当事者に玄舜があたりなど、その活動は、矢野庄の運営になくはならないものになっており、玄舜の田所としての地位は、安定したものであったと言える。続く家盛は、守護方により、名田も、田所職も關所にされ、田所職は、これで終わるが、応仁の乱後、今度は、矢野庄の請負代官となった赤松政秀の地下代官として、再び莊務に復帰する。家盛の時期は、田所の消滅期と言える。そして、息子の家延が、その地下代官の地位を継いでいくが、その活動は、永正一四年には終わる。家盛の時期は、田所の一族であつた本位田一族の衰退期と言える。

田所職という、一つの職を通して、東寺領矢野庄の歴史をながめてきて思うことは、建武年間から、觀応の擾乱、嘉吉の乱による守護の交代、応仁の乱等、大きな変化にもかかわらず、一つの一族が矢野庄という莊園で二〇〇年にもわたつて在地の莊官をつとめられた背景は何なのであろうかということである。家盛の後半、そして家延は、東寺から、その主を守護方へと変えているが、なぜいったん田所職を關所にされ、新見庄に行つていた家盛が再び地下代官として登用されたのであろうか。やはりそこには、この地域での代々の田所の一族としての本位田一族の伝統・歴史というものがあるように思われる。

そもそも、田所の一族である脇田氏、それに続く本位田氏の地位は、福勝寺の住持が背景として始まったものであり、そのような地域の有力一族の成立が、二〇〇年にわたつて一つの一族が田所職を続けられた背景としてあるのではないかと考える。

そして最後に、在地の莊官としてこのような地域の有力一族の存在こそが、莊園の維持に不可欠のものであり、それは、本位田一族が姿が消すのと矢野庄の消滅が同時であることが物語つていえる。

## 注

- (1) 『史学雑誌』第九四編第六号・一九九五年
- (2) 『日本史研究』三五四号・一九九二年
- (3) 『日本史研究』三六八号・一九九三年
- (4) 『白河本東寺百合文書』一三九
- (5) 例名福勝寺免田并延里・得善名名主職補任状案・『相生市史』第七卷七九(『教王護国寺文書』三〇九)
- (6) 例名内福勝寺修理別当職宛行状案・『相生市史』第七卷一〇五(『教王護国寺文書』三四三)
- (7) 例名西方重藤名内福勝寺修理別当職補任状案・『相生市史』第七卷七四(『東寺百合文書』し函一六)
- (8) 智芸侍者申状・『相生市史』第八卷下七一(『東寺百合文書』し函九二)
- (9) 『相生市史』第二卷にも、同様の指摘がある。
- (10) 『相生市史』第二卷
- (11) 西方名主・百姓等申状并具書・『相生市史』第七卷一八(『東寺百合文書』サ函八)
- (12) 同(11)
- (13) 同(11)
- (14) 同(11)
- (15) 同(11)
- (16) 学衆方評定引付貞和五年四月十日条・『相生市史』第七卷九(『東寺百合文書』ム函二二)
- (17) 学衆方評定引付観応元年五月三日条・『相生市史』第七卷一〇(『東寺百合文書』ム函二三)
- (18) 学衆方細々引付貞和四年八月七日条・『相生市史』第七卷八(『東寺百合文書』ム函二一)
- (19) 学衆評定引付康永三年一〇月五日条・『相生市史』第七卷二(『東寺百合文書』天地二)
- (20) 学衆評定引付文和元年三月六日条・『相生市史』第七卷一三(『東寺百合文書』天地五)
- (21) 学衆奉行引付観応元年七月三日書状・『相生市史』第七卷一一(『東寺百合文書』ム函二四)
- (22) 兵衛尉家兼田所職請文・『相生市史』第八卷上二二〇(『東寺百合文書』テ函三三)
- (23) 僧秀恵田所職并種近名名主職請人請文・『相生市史』第八卷上二二四(『東寺百合文書』テ函三六)
- (24) 法師丸家久田所職請文・『相生市史』第八卷上三一五(『東寺百合文書』テ函五一)
- (25) 学衆方評定引付延文四年四月廿二日条・『相生市史』第七卷二〇(『東寺百合文書』ム函三六)
- (26) 『相生市史』第二卷
- (27) 祐尊については、(一)(二)に詳しく述べられている。
- (28) 学衆評定引付永和三年正月廿日条・『相生市史』第七卷三八(『東寺百合文書』ム函五二)
- (29) 同(28)三月五日条
- (30) 同(29)
- (31) 同(28)三月一四日条
- (32) 同(28)一二月八日条
- (33) 同(32)

- (34) 同(28) 一二月一二日条
- (35) 同(34)
- (36) この事件に關しては、拙稿「東寺領莊園の和市と算用状」(『史学論集 佛教大学文学部史学科創設三十周年記念』・一九九九年) 参照。
- (37) 名主・百姓等申状并連署起請文・『相生市史』第八卷上五六五(『教王護国寺文書』六七八)
- (38) 田所職文書・『相生市史』第八卷上五七二(『東寺百合文書』よ函八七)
- (39) 東寺申状・『相生市史』第八卷上五九一(『東寺百合文書』ノ函一一四)
- (40) 二十一口方評定引付応永一二年九月二七日条・『相生市史』第七卷六九(『東寺百合文書』く函二)
- (41) 玄舜田所職請文・『相生市史』第八卷上六八〇(『東寺百合文書』無号四七)
- (42) 二十一口方評定引付応永二〇年一月二五日条・『相生市史』第七卷八二(『東寺百合文書』く函六)
- (43) 学衆方評定引付応永二二年一月九日条・『相生市史』第七卷八五(『東寺百合文書』ネ函九一)
- (44) 学衆方評定引付応永二五年九月二四日条・『相生市史』第七卷八九(『東寺百合文書』ネ函九三)
- (45) 二十一口方評定引付応永三〇年一月二〇日条・『相生市史』第七卷九九(『東寺百合文書』く函一〇)
- (46) 学衆方評定引付応永三四年九月二五日条・『相生市史』第七卷一〇五(『東寺百合文書』ネ函一〇五)
- (47) 二十一口方評定引付応永三一年五月一三日条・『相生市史』第七卷一〇一(『東寺百合文書』く函一一)
- (48) 同(47) 五月一七日条
- (49) 同(48)
- (50) 供僧方年貢算用状・『相生市史』第八卷下七六七(『東寺百合文書』ら函三四)
- (51) 供僧方年貢算用状・『相生市史』第八卷下八五五(『教王護国寺文書』一一八九)
- (52) 同(51)
- (53) 同(51)
- (54) 供僧方年貢算用状・『相生市史』第八卷下八六〇(『東寺百合文書』ら函四二)
- (55) 同(54)
- (56) 学衆方年貢算用状・『相生市史』第八卷下八六六(『教王護国寺文書』一二二二)
- (57) 供僧方并公文名内検帳・『相生市史』第八卷下八二六(『教王護国寺文書』一一六〇)
- (58) 学衆方内検帳・『相生市史』第八卷下八二七(『東寺百合文書』オ函一三八)
- (59) 供僧方内検帳・『相生市史』第八卷下九一六(『教王護国寺文書』一三七二)
- (60) 公文名年貢算用状・『相生市史』第八卷下九三〇(『東寺百合文書』れ函六九)
- (61) 田所玄舜請文・『相生市史』第八卷下七八五(『教王護国寺文書』一一二七)

- (62) 供僧方年貢算用狀・『相生市史』第八卷下七九五（『東寺百合文書』ら函三五）
- (63) 田所本位田家盛田所職請文・『相生市史』第八卷下一〇〇一（『東寺百合文書』ヤ函八四）
- (64) 二十一口方評定引付長祿二年一〇月二〇日条・『相生市史』第七卷一三五（『東寺百合文書』く函二二）
- (65) 東寺方内検帳・『相生市史』第八卷下一〇六五（『東寺百合文書』ま函一三（一一））
- (66) 田所本位田家盛申狀・『相生市史』第八卷下一〇七二（『東寺百合文書』モ函二〇六・ツ函一三八）
- (67) 代官慶泉書狀・『相生市史』第八卷下一〇六六（『東寺百合文書』し函一三五・『教王護国寺文書』一九三四）
- (68) 同(67)
- (69) 高枕軒赤松性喜書狀・『相生市史』第八卷下一一五五（『東寺百合文書』マ函九九）
- (70) 本位田家延書狀・『相生市史』第八卷下一一八二（『教王護国寺文書』二二三五・『東寺百合文書』チ函二七九）
- (71) 同(70)
- (72) 本位田家延書狀・『相生市史』第八卷下一一八五（『東寺百合文書』し函二八〇）
- (73) 代官永山真久書狀・『相生市史』第八卷下一二二三（『東寺百合文書』ニ函一七二）
- (74) 同(8)
- (75) 二十一口方評定引付応永二年八月七日条・九月二七日条・『相生市史』第七卷六九（『東寺百合文書』く函二）
- (76) 福勝寺相伝系図・『相生市史』第八卷下八九二（『東寺百合文書』ケ函三三九）
- (77) 二十一口方評定引付応永三〇年一月二四日条・『相生市史』第七卷九九（『東寺百合文書』く函一〇）
- (78) 同(8)